

311. 石仏と中世墓

1. 現代社会の中にある「石仏」

読者の方の中には、田んぼの畦道や古い街道の傍らに小規模の石仏が置かれていたり、町の辻の小さな祠の中にカラフルな布で作られた涎掛けが懸けられた石造物が集めて祀られているのを見かけられたことがあると思います。現在一般にそのような石造物を「お地藏さん」と呼ぶことが日常的に行われていると思います。「お地藏さん」と呼ばれるところからは、仏教の諸仏のうちの一つである「地藏菩薩」としてそれらの石造物を大半の人々はみなしているのだと考えられます。ところが、「お地藏さん」と普段呼んでいる石造物を詳細に見ると、全部地藏菩薩を彫り出した石仏ばかりではなく、「地藏菩薩が彫り出された石仏」以外のものも多くあります。中には直接仏様の図象が表現されていない石塔やその残欠といった、本来仏像とは関係のない石造物まで含まれています。このように現在では「お地藏さん」と呼ばれる石造物は、その中身が本来の地藏菩薩像以外にいろいろな種類のもので混同されてしまっています。仏様を彫り出した石仏に限っても、その図象からは地藏菩薩像ではなく、まったく異なる如来像としか判断できないものが多く含まれているのが実状なのです。

2. 中世の石仏

ところが、埋もれた中世の遺跡を調査していると、石仏が出土することがあります。中には石によって方形に区画されたお墓の上に立った状態で出土したものもあります。どうも、現在のような石仏の使い方とは違っているようです。このような中世墓で出土した石仏の一例として、甲良町正楽寺遺跡で検出された中世墓と出土遺物を見てみることにしましょう。

中世墓を検出した正楽寺遺跡は甲良町正楽寺の集落の西側、勝楽寺に隣接する山の中腹にあります。中世墓と見られる遺構は合計10基検出されています。石で方形の区画を持つ区画墓と考えられます。区画墓9と呼称されている墓は残存状態が良好で、墓の上からは原位置を保つ五輪塔の地輪や石仏が出土しています。

この区画墓は途中で半分を改装していますが、当初の姿を留める部分では茶毘の後集められた骨を納めた陶器の壺や焼けた骨片が混じる灰を直接埋めた穴が検出されています。この壺や灰が埋められた穴の上には五輪塔がありました。ところが、同じように区画墓の中に立っている石仏の下には何も埋められた形跡はありません。周囲にも五輪塔の下以外にそのような形跡はありませんでした。このように、正楽寺遺跡においては石仏は墓標ではなく、別の目的を持って立てられたものと考えざるを得ません。

なぜ、墓標とは別に石仏を立てるようなことをしたのでしょうか。平安時代の仏教書には「毎月お墓に石塔を建てなさい。」という記述があるものがあります。それは「埋葬者の供養のために」このような行為を行うのだとしています。ここで書かれている「石塔」は具体的にどのような形のものかはっきりしていませんが、墓標が立てられた後に墓にはある種の石造物を追加して立てられることが行われていたことを伺えます。



図1 小型石仏の一例（甲良町金屋所在）



図2 正楽寺遺跡区画墓9平面図 (S=1/40)

現在でも墓地へ行くと墓標の周囲に木製の卒塔婆が建てられていたり、お供えの品々が置かれているのを見受けられます。このように、死者の供養のために石造物等を墓に建立することを「追善」といい、正楽寺遺跡出土の石仏はこの「追善」のために立てられたものであると考えられます。

3. 正楽寺遺跡出土の石仏

正楽寺遺跡から出土した石仏には3種類の形があり、便宜上、これをA～C型と分類します。A型は外形を光背形に加工し、仏像のみ浮き彫りにしたものです。B型は外形を屋根のある龕を模して作り、中ほどの方形の彫り込みの中に仏像を浮き彫りにしたものです。C型は長方形の石材の中に仏像を彫り出した箱型のもので、A型とB型はそれぞれさらに細かく分類することができ、A型は脚の表現があるものとないもの、B型は仏像の横に柱の表現があるものとないものそれぞれ2種類に分けられます。彫り出されている仏像は全て座った姿でした。胴体の前で脚の上に乗せるように手を組み腕を構えています。この腕と手の形は印

とって仏像によってそれぞれ異なり、このような表現を持つ仏像は如来を表した像であるといえます。前述した印の様相からは、阿弥陀如来像の可能性が高いのですが、仏像の中には手の部分が簡略化されているものがあり、似た形態の印を持つ如来像がいくつかあるため、はっきりと彫り出された像が阿弥陀如来であると言い切れません。ただし、像の様相からは如来の内のどれかであることは間違いのないといえます。細かく彫り出された印を見てみると、指が「∞」状に彫られている「弥陀定印」が多いため、彫り出されているのは阿弥陀如来である可能性が高いと思います。

4. 石仏の製作年代

石仏を作り始めたはいつごろからなのでしょう。浮き彫りの石仏としては、古くは奈良時代に遡ることができます。奈良市にある国指定史跡頭塔には階段状に積み上げられた塔の側面に独尊や三尊形態の石仏が40体ほど安置されています。平安時代以降には各地に磨崖仏と呼ばれる形態のものが残されています。では、正楽寺遺跡の石仏はいつごろ作られたものなのか

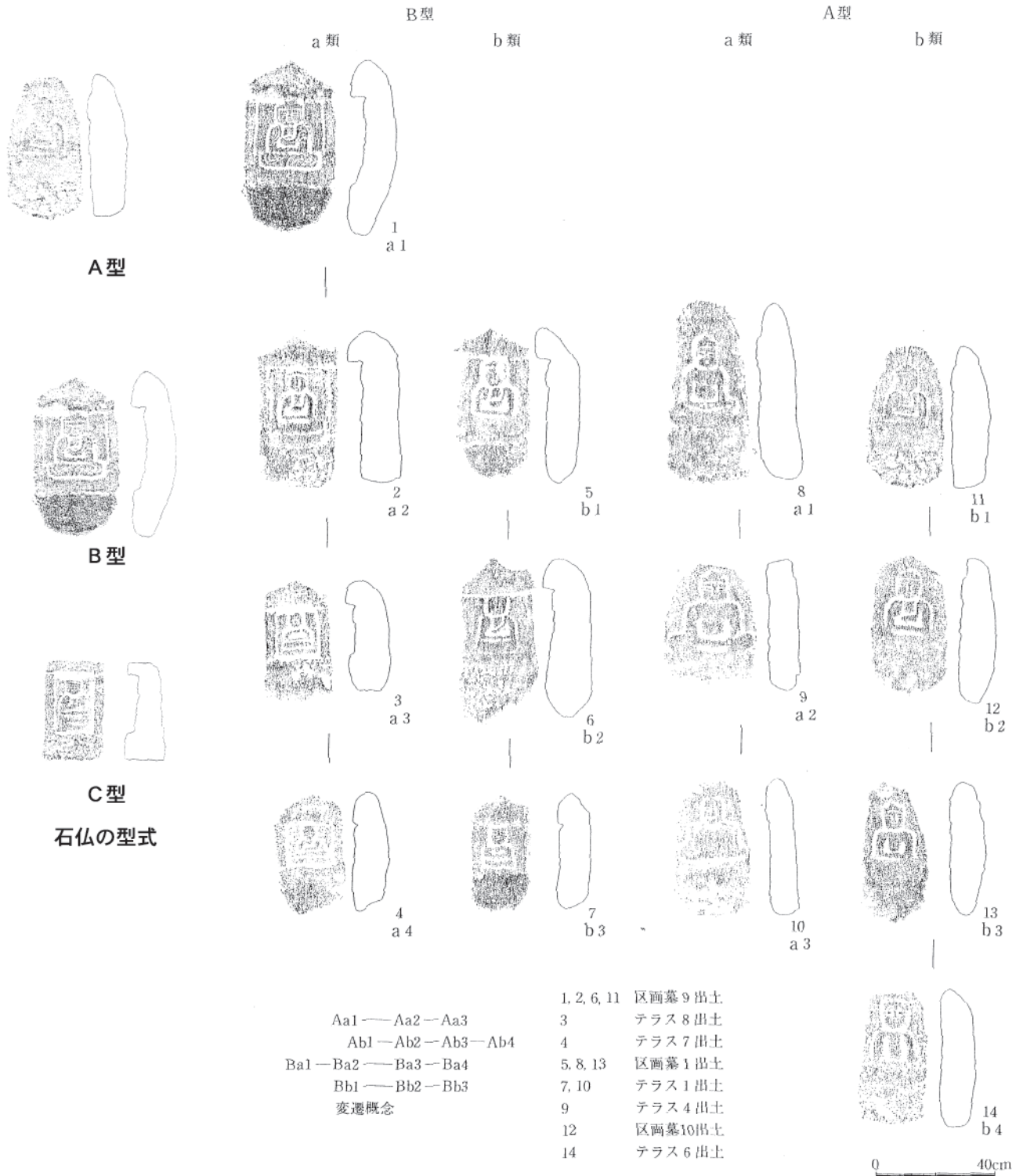


図3 正楽寺遺跡・出土石仏の型式分類と変遷

しょうか。

正楽寺遺跡で出土した石仏には年号など作られた時期を示すような銘文などはいっさい残されていませんでした。また、時期が明確に判明する遺物が一緒に出土していません。そのため、石仏の製作年代は他の類例などによって突き止めなければなりません。このような場合、まず発掘調査で出土した石仏同士を比較し

て新旧を決めていきます。ただし、C型の石仏は1体しか出土していませんので、比較の対象からは除外しました。その結果、いくつかの形状の相違を見出すことができました。

一つ目は仏像の表現に差があることです。仏像をそれぞれ比較すると、細部まで詳しく彫り出されているものと全体に粗く彫り出されているものがあります。

通常、考古学では詳細な表現から粗く簡略化したものへと変化すると考えられているため、細部まで詳しく彫り出されているものが古いものだといえます。このような視点で見ると、仏像の表現にはいくつかの段階があることが分かります。最古のものには、仏像の頭部に髪の毛、目鼻が彫られ、頭の天辺には肉髪も彫り出されています。胴体や両腕、脚には着衣にできた襞も表現されています。仏像の下には台座もあります。このような表現が順次簡略化されていき、最後には頭部の目鼻や肉髪も表現されなくなり、胴体にも細部の表現がなくなります。台座も仏像との境に線刻が施されるだけの単純な表現になります。このような変遷がA型、B型それぞれに3～4段階に渡って起きているようです。甲良町の北側に位置する多賀町の敏満寺遺跡内にある石仏谷中世墓には正楽寺遺跡の石仏よりも更に古い段階のものがあります。これには仏像の詳細な表現に加えて台座部分に蓮弁（蓮の花びら）の線刻を持ち、より詳細な表現が施されるものです。

二つ目は額部と呼ばれる石仏より上の部分の厚さに差があることです。この差異は一つ目の相違点に対応していて、石仏の表現に合わせて見ると、詳細な表現を持つものほど厚く、簡略化されたものほど段階を追って浅くなり、最後には線刻に似た表現になっていきます。

次に同じような石仏が出土している他の遺跡の例を見てみましょう。他の遺跡の例には出土した遺構や一緒に出土した遺物の年代から石仏の制作年代を伺える資料が見出せます。安土町にある安土城跡は織田信長が築いた大変よく知られた遺跡です。安土城の石垣等に石仏が用いられているのは古くから知られていましたし、同時代に日本に來日したイエズス会の宣教師ルイス＝フロイスが著した『日本史』にも信長が旧二条城の石垣築造に付近の寺院から石仏を徴発し石材に使用した記事があり、旧二条城の時と同じように安土城の築城時に石仏が持ち込まれていると考えられます。大手道の調査の際に出土した石仏を見ると、正楽寺遺跡出土の石仏の最終段階のものと共通する表現を見出せます。安土城の大手道は1576年に造営が開始されているといわれていますから、石仏はそれ以前のものとして推定できます。彦根市妙楽寺遺跡では土坑から恐らく投棄されたB型の石仏とほぼ同じものが出土しています。この石仏は16世紀代の土器類と一緒に出土しているので、この土器類とほぼ同じ時代のものと考えられます。これらの例から、正楽寺遺跡の石仏も16世紀代には既に製作されていたことが解ります。また、蒲生郡・神崎郡内には「近江式装飾文」を持つ石仏の例がいくつか知られており、彫られている三茎蓮文の検討から蒲生町の石塔寺所在の最古の石仏は

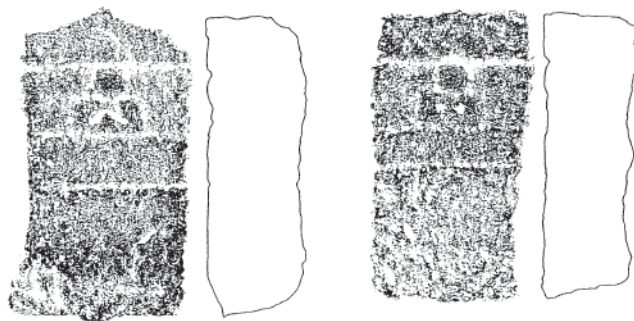


図4 安土城跡出土の石仏（S＝約1/12）

14世紀前半に位置づけられ、その他の資料も15世紀前半までのものと考えられています。⁽¹⁾正楽寺遺跡の石仏は最も古いものでもこれら三茎蓮文を持つ石仏よりも幾分表現が簡略化されていることから、15世紀を遡らない時期に製作されたと考えられます。以上のことから正楽寺遺跡の石仏は15世紀から16世紀の後半ぐらいまでに製作されたものと考えています。

近世にはこのような石仏を墓標の周囲に立てる風習はなくなってしまったようです。墓地自体もあるものは移転し、忘れ去られてしまったり、墓地全体を改修し、新たに近世墓として生まれ変わってしまったものもあります。そして、墓地から持ち出された石仏や五輪塔等の石造物は庶民階層にまで浸透した地藏信仰の中に組み込まれ、近世以降に改めて「お地藏さん」として扱われるようになったと考えられます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 上垣幸徳）

注)

- (1) 兼康保明「近江式装飾文より見た小形板碑の年代」『紀要』第11号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1998

参考文献

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『正楽寺谷荒廃砂防工事による発掘調査報告書 正楽寺遺跡』1997
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『宇曾川災害復旧に伴う妙楽寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1985
 滋賀県立安土城郭調査研究所『特別史跡安土城跡発掘調査報告書2』滋賀県教育委員会1992
 同上『特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書V』滋賀県教育委員会1998